

門遠 13
2209
19



繪本豊臣勲功記二編卷之九

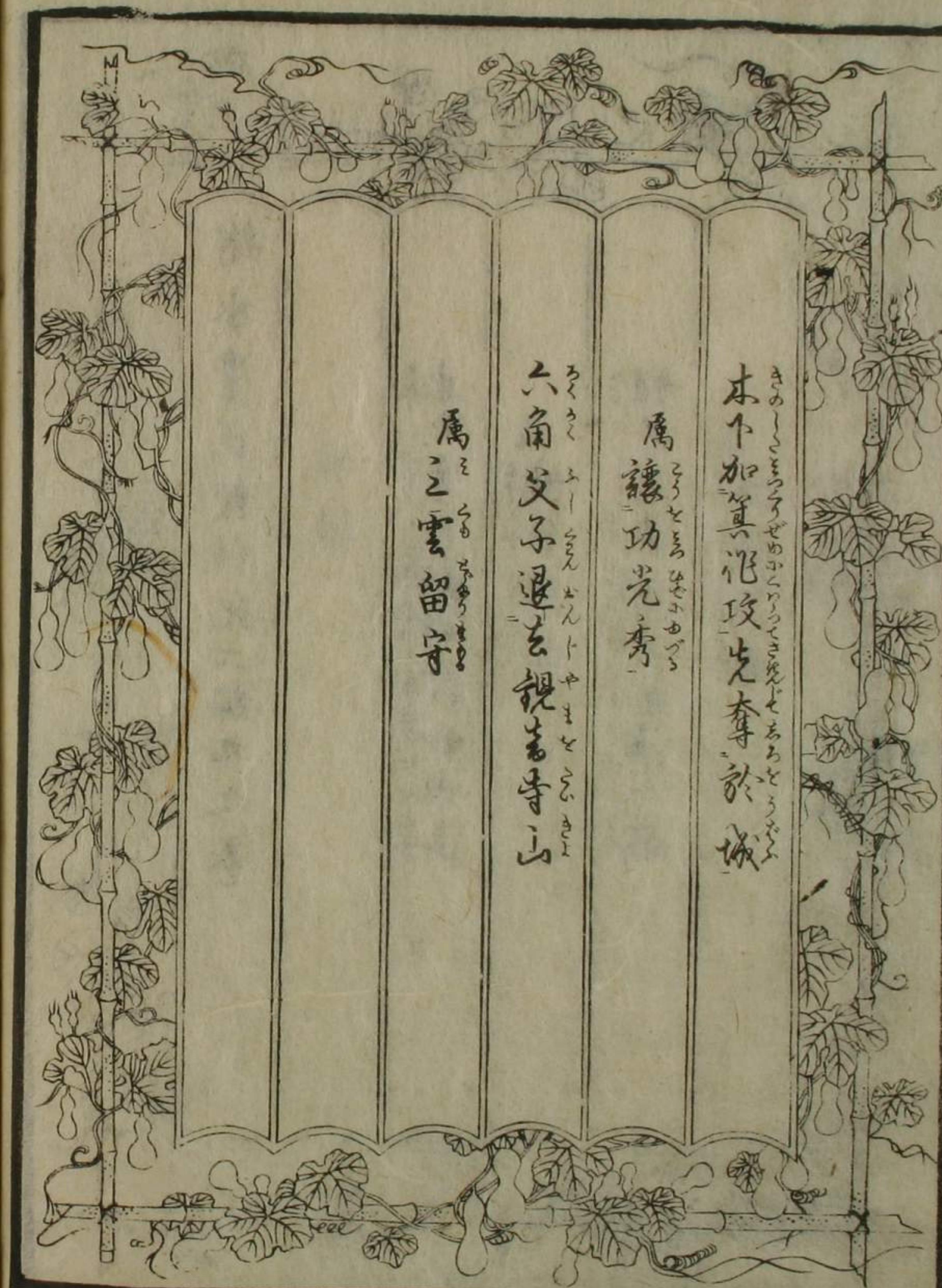
江戸

八功舍 德水刪補

木下秀吉朝時縮和田山属

誠弱降參

勇種を描きとぞとべ。兜臺も是が威し。智恵と圖せんとぞとば。天神
も成こと被ふと。木下紫田ヶ諱論へこそとりて比する小足れ。既小
藤吉郎秀吉の計より御付引まで。と時を期く和田山を攻撫さん
と誓約す。と勝家尚も危難で詞の根を握り聚て回す。勢ひあくと竊
かうち少。和田山を攻撫して。堺より箕作と簾さる。秀吉等と升り和田
山へ地形をとく。愈一々とも不目不簾。まし城かく。攻撫さんと最易し文
箕作へ情狀えぐら。美須入道教軍の間有固く。城あり。和田山と一樣か
謂う。然ども是も明日の午は計られ破守將吉田出雲守を退散。時



木下明智

心を競く

和田山箕作の
両方へ發軍を



豊臣已二編卷之九



佐の右衛門と喜んでいた。秀吉は驚きと喜びで顔を怪しまる。よく
是下の兵士をうなづく。但所加勢どもをもて和田山攻め回らし歓喜の念が
及びりさぬ。秀吉は勢のみかて攻陥すること論す。然みぐら親を守るの
株口へ陣隊伍とそぞたまくるべ。一方一本城の加勢もあらば侵おかうぞ。修筑に至
らの準備と詫ひ入ると所へやままで大將信長は御が例の大縄をやつす
とかがくもれ。明智光秀と叫出され。藤吉郎が重を保険へ仰とありとぞ。
と訊ね玉ふ。小光秀承所已前より兩家の諒定と熟く諒聽つゝ。小
じぎきの説もまたに聞かず。所へまわらも中少納とも本下刀様の後へ宿定
勝利を期ひかへん。よし小臣新条をだら。先陣小部をまきて惟守が湯殿の
城攻と他物不思て立たん奉意なし。惟。本下和田山小向をもひかへ。怜ひ後見
作攻と。辭をたまひ入。光秀も一時限と被城と攻陥へ。惟。と前まく

小柴田ことを喜び心中小なり。やう。本下一個小森城と攻陥せん。傳輪をも
光秀と加えり。秀吉が功と減きをもと心あさくも言と進めて。ひきかみ明智
のモとも。之をも。小所ゆき。本下一隊の兵士をり。兩城小向をも。人
馬の疲労も最甚きをし。箕作の方へ光秀小向撃きと。とりも
と信長をも。然ま速攻解手と。妙ある方側のあきらこそ。兩人
同様か。重もら。無らば辞窓をすきをきども。秀吉の仰とちりとぞ。と
せゆる。本下詳附。明智が前を悦べ。帰くの行脚も速く。二の城とせゆ
と。六角武士の肝と。冷きをひき。又光秀小向も。傳ひ此か被君の
御為ゆ。隨す中心奮団と極き。もとし箕作へ。和田山城と。今下からも。殊
きうち。下の済自らとても。最深處を。作。小臣和田山と。藩地あけうべ。
其陣中。衆を會す。無らむ。已までの申小箕作城と攻させま。

重あら小明智ハ新条をまへ強こきを論じもせど。誠妻所禱うてひよー。此役
の折名揮鞍人と昇下の朝小柴田の像脇か。明智が功を手下に勝せなと
ありひよき。算は攻小からうて。自製を助る分撥りを。信を本不看吉郎へ
か治田。福田小指揮を傳へ此を重の郷士軍を招集する。など小山で多くの
案内者六百余入小既に。遠岸小奇計と隸合せ。か治田隼人福田大炊。
青山彰七。全小助。喜。に半之四。の口久助。幡尾茂助。遠七八人を大將と。
十一日酉下刻より。和田山の後背小廻。一面圍の間。打声と。行ばれをせよと
教諭させ。情に地つるを。程小六百余人の號も。徑路と。統がて登りけ
る。おと。36. 園うちらんと。たる月夜。元山の高峰と。隈かく。照らす。小路。渓。れど
行ひ。うらぎ。渕。木猿。小判。まぬる。此重の岩石。肩を。からて。樵夫の通ふ
徑も。や。然ども。演。祖。小競。あらう。若輩。異とも。かき。跳越。く。遂。小和田

山は。徳模。小登。斯。此。參。う。城中と。沈覗。小崖。う。測と。障が。か。。六百余
人の郷士軍。ハ。本下。大。隸の。神。小通。と。寺。う。と。感。ド。いつの。障。小。被。人の。珍
る。地理。とも。見。重。と。不。恩。儀。さ。と。惜。き。る。備。又。退。卒。は。巧。ロ。少。ハ。本下
が。自。公。三。千。拿。人。淺野。彌。彦。中。村。孫。助。本下。小。市。角。大。澤。主。水。輝
哉。か。軍。天。小。攻。よ。べき。財。と。糧。を。藤。ま。角。の。木。障。ふ。を。て。納。セ。ー。時。刻
ひ。を。う。か。う。ち。起。人。ぞ。と。待。居。う。然。で。ど。に。和。田。山。の。據。申。ふ。の。六。角。義
徳。一。族。山。中。山。城。ち。長。俊。因。中。治。新。大。浦。吉。政。あ。人。と。大。輝。と。之
千。余。縄。と。對。敵。守。彰。不。遼。め。一。城。み。だ。り。い。と。も。を。双。の。要。害。を。見。べ
鐵。田。勢。四。万。の。大。軍。と。些。も。恐。そ。氣。色。なく。夷。濃。勢。を。そ。く。推。進。や。
に。列。威。さ。の。功。誉。と。見。せ。ん。と。勇。氣。と。撃。手。ー。待。と。ろ。ふ。十一。の。夕。東。ま。よ。

進兵の麓小陣を布り、櫓の爆轟し、東西噪しく聞かゆ。城中少く
もは多く、またと引近防を。虎に力を持固め、木大石等を充てん。
隊隊も分まじて今捨かし。山中主ふる軍船も雷舟を運べ、方へ心せ
配り。背面へ踏廢として不動塗内の化國を。之をう得べんや然へ共
準備せざんばあらト。と五百余人を引分て背面の方へ立た。又率
九の青本を蓄えと首領として五百余人を率て面圍へ別て全軍
をまへ田中吉政と合隊を。一千余兵少て固ゆ。且小鐵田の軍
斧の剣、かもうし頭本下明智一同小石陣を擔登し。和田山を主將
(ある)諸藤吉郎秀吉へ先達て麓へ降参する旨せしと合隊となり。
諸兵小指揮して用と作。火砲を放ち墓山の半嶋まで操揚一ヶ機中
小ひもまと圓ぐ。弓小矢を量へる。既小銃を洗せしれ。今やく待ねど、本下

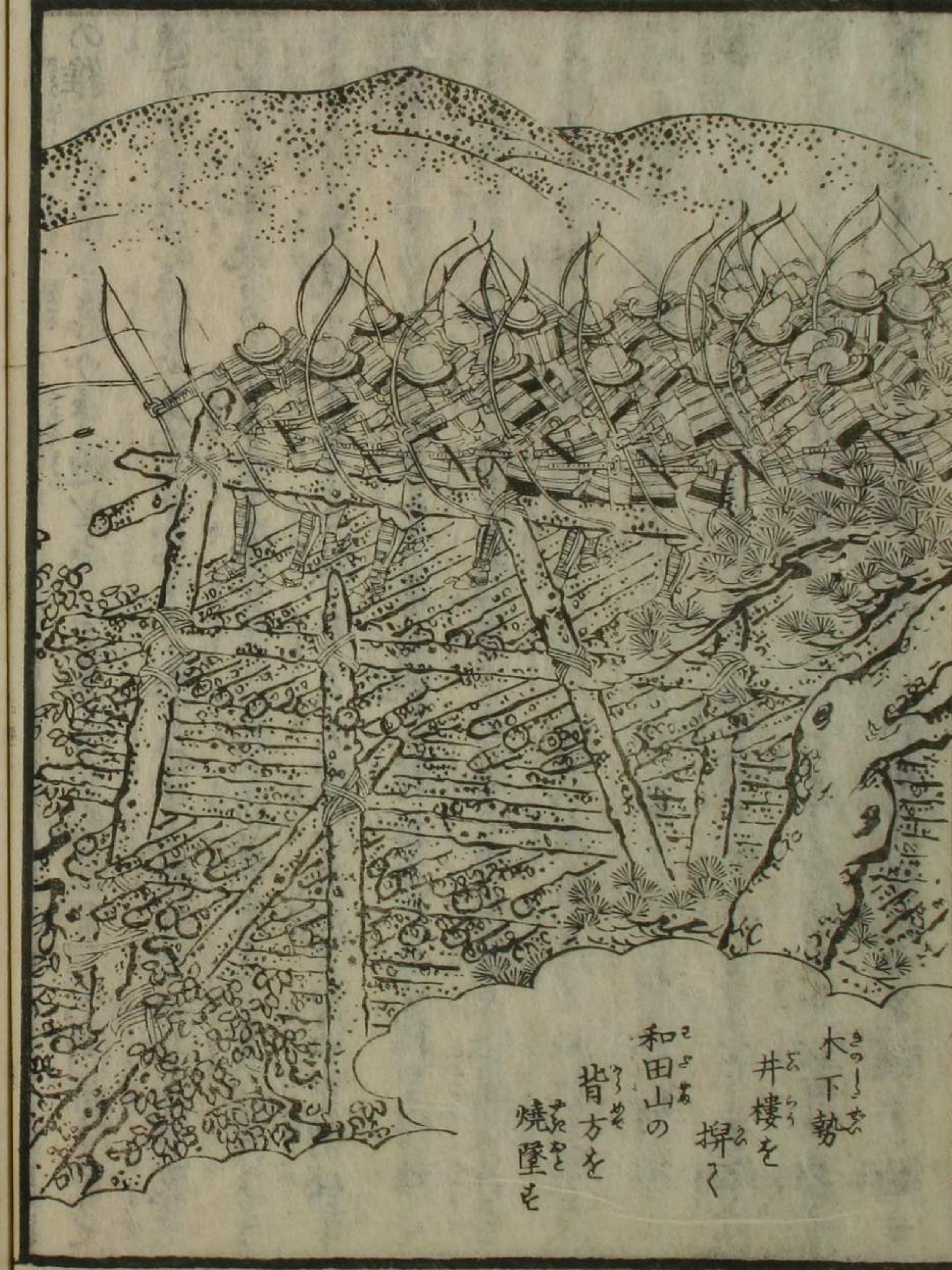
再び諸兵小指揮かし。又甲賊小登る。まば附位を居て徇す。しる者
此小路止す。機中屢停どとも敵をも進まざる。待詔の延まざる軍船
輩。漸く邊づけの心を生ト。己生と通ふ面と見合し。既に手綱とつて
至。木下松久精靈時時も船を立さしめし。亦りや芳び噪起喚叫で
草聘毛小椎毛の体とある。然ども更不進まもやら。初の御くもる
緯。之度小なり。己生と協共事と被らを。櫻乳小勤。右も左もも
用意て。竟天道く。多し。時もひよれどと藤吉郎人數を擇揚。城小を
づき。城せ作りを。既とまち萬葉。之く己生と攻ること。でも城を守候
も乳も破。其體力も脱し。而もまば櫻乳噪ぐのみ。抽様く軍を也
折てまば背園へ向ひ。六百余人の個々へ。總く木下の指揮を。強小
移本と云て。荷肩せと登る。そと。如何用とも謂ざしき。唯不寄くも

あり。かづか治田稻田、餘指揮にて井樓に達せしと小袖て木下の事
計を盛り。又と小登りて城中を觀るに終り、間はと隔て月は光小
燎と遙く、制敵くつひを更より。掌小把、やく親をう少ぞ、宣こまを小手
のち。面圓は曉漠を窺ひ居る。小えや曉漠る東雲の宣小映じあま
の重振本隊く小翻。旗の墨素色もじき。本懸小晦く喊の声渾音
小近く、听ゆき。また、面門へ合戦を下かす。然ば此方も背門。さうも
破もととゆき。六百余人、更て井樓の上に立並び大箭を射たる
緯兩轍こもがため、遂連ね、制敵くと焼起らき。かせがんとどる軍
も懸応き。とせまくる石と落び山下り。手流をげく歩起て、
擣牛をす。五百余人、鑿小をかみく里へ下りて、响小黒烟く天を焦し。
遅くの方へ靡き。大羽山中山城。田中治教小うち向ひ備の門

の難兵们守不急り。半過をかへる。あらん足下へ背門へ御廻りありて
遠くから登り防がせ玉て、所ふよりと二百討の人数と、率ひ背門の方を
行をそろ。本丸よりの音本を蓄。生火小猿兒延長見まへ背門とまりる
玄車へ、島鏡お大半轍を残る。玄車の内お煙うちれ煙うちる遠もて例伏
悶惑うちあるのとあま。また、本を蓄自懲小指揮か。ゆと積むと擣く。
木下部の勇士達山とよろこきと音く。外うもとま根やと小奥見ふ。手を
身控ふ。手控潜御ふ熱し。壯士輩走下て、擣ふ起石薦揚。逃散にて金人
一個も残らず。城中へ竄入大と詫ひと経て。城兵们と指揮小射側
察側一勇を揮て、擣起て、素起と薦葉武者们一通もさへぞ。食逃
脚ふ。うらぎ。青木も方進へ防ぎ。しれ遅えとまると、田中吉政と
百余人馳走へ遅く。とも、臆病神小向引城を。散乱として煙うちれ敵を



木下勢
和田山の
背方を
井樓を
燒墜毛



城守ふをも満たまへ比所を防止んと難免うまづ本丸(速)に就り。田舎て討伐
を遠らまじと本丸當てひれ逃げ又山中ひ城ち長後ひ面門を大事を拒抗
するが。本ト藤吉舟秀吉。城守の身声と仰ぐも胸こそよけ玉を而進り。又入
や門と車をもよぶなし。遠隊の勇士三千金人一瞬もせど推進て。毎二度と小攻
起まば。山城守長後ひ朝死勝かとくひども。背門既かうら破らる。敵城守へ龍
投責本田守も駿みせし。事々小鳴ちるやへ了得種威の山中もこきふ経き
惑ひきも。心もこゝれあつさき。がうすを纏ひ射出を矢も疎漏かうと得こうや
應と本や方の芸軍。我からトとそ繩掛けまば。山中も今ハ惆悵。氣を棄えま
立たる。而以田中の兵士走り來ひ。敵本丸を攻起て。車をやるふかうとまび面門を
走り。糸をひく。峰なる芦子山中も或の持きあひの壁に射殘さざる兵士を纏
棄て。邊坂王。峰なる芦子山中も或の持きあひの壁に射殘さざる兵士を纏
とより。本丸を守りしと。本丸逃くもことを悟。使者を本丸へ當遣し。
や幸丸當て退きけまば。本丸勢の宮易も退く手は九を無百より。直地ふ本丸(押)

かすて。攻小笠さんと。一ノ市へ背門より廻す。三百人。面門へ集うり。少う。秀
吉志士を大不賞。若一。備總軍と一隊かく。本丸近く推進て。多小役を威と
あめせ。三卒爾も攻ぎうちと。城を方檻へ城を逼よ。其作と。争ひの小方ら。若
とより。本丸を守りしと。本丸逃くもことを悟。使者を本丸へ當遣し。
町寧ぶりかせり。八軍のあらひひら矣の道も既是まで小作を。罪を犯す卒
を失ふ。防ぐとも益かう。而もまた信長小恨ある事小もあらず。
一端忍義小報。止ことと得ざる。防戦からん。小登く當城を閑延興日へ
兼徳へ道。小も和睦と勧め主さんこと。一族家寧職の忠義をもべ。遠義と
申得せらう。と。東送り。小なり。山中田中も此理小休。敵射を。一城
兵の命を助救あらんとあら。俺们降参つまう。城と解。遅興りあらべ。と
返答せ。小本丸脱び。遠車と親行ひ。謀を悉く助出。次小山中田中の



西將軍番刀伏とお小弟をも。本トの陣小降參と秀吉を主と續多分し。
二人とも石保を陣へ到りる小時ちに脇の敵あり。強も二時半をもみさ
しも攻め、和田山を攻め。大將二人と陣參とを自ら小員御事まで
きく。十分の勝利うとそ。第一の勳功とぞ感せらき。本トを取れども山中
田中の兩人と大將の前導生。見参の式と執取多々。君ふも神助の事
き。本ト次第とすと、余出さまくるふう。輕意の如く本トの郭下とす
タニケ山中三の角家へ歸る。人の和諧と而調ふべし。田中ハ當方小止
ま。忠勤せらまきよと余せらまく。

坂井久義與遠野源八戰 厲鳩援久藏

種歎むのとと別一とて。御子小双さんとととも並ぶこと徳もぞ。然やど
小明智十三衛光秀。秀吉と功と章を。善作城と考ふる。本ト

と固ト時刻不の大勝の本陣を進撃り。に柴田佐久間加賀と一。富
士割びら箕作。山の足まで推進。此まで光秀城攻の宣傳を
ふ又成せり。も。被申の攻便悪く。あん堵も。待く城共と勾引。出でて
縛らまく。と隊伍を固め。を急か。動く。勝家信重兩人も。あま小固ト
てあり。が。紫田佐久間。は士卒。恐止ぬ。かど。所害。くと。夜明。と。行
く。小猪乳の急。二年隼人。就進。を攻。よ。喊。せ。修。を。流。と。お。発。
車。縛急。小。隔。さんと。お。と。見。す。う。城。は。大。將。吉。田。出。雲。守。重。光。ま。の
篠山雲ち重忠の長子。あり。底。小。糸。滿。と。ひ。日。毛。流。ま。の
ら。の。名。家。を。と。ま。お。ゆ。か。な。の。重。綱。の。こと。う。些。も。發。が。む。頗。く。準備。の。高。炮。を。うち
登。大。木。太。石。を。投。ト。烈。一。階。き。る。程。お。柴。田。佐。久。間。が。名。士。軍。心。み
き。と。進。く。得。ぞ。發。僅。起。て。見。す。本。と。遠。野。源。八。戰。秀。明。二。齊。尼。集。歌。の。次。第
其。八。年。秀。治。の。事。を。或。ハ

源氏が借て歌を漂かされ是とぞとぞ殿へ發致散さんとの事す。ふ
自ら立て強打を率ひ本戸を一回転して斬て出る源八食滿秀明に別
を取の勇士とひき立つことの御者か。正麿少進で大富あげてまく
大將もさき端争がござりの難小役登りて隊伍もそぞ行おど。兵を
駿小路往セと喰所で歸て詮ア前顛後例右筋左轍を羅起と紀
西主。柴田佐久間が魁隊の兵士们數々小折毛利坂下さへ迎候。
達致へありて千弓小柴田佐久間の二千余騎を拔て中主を退せ。い
さんで城中へひた返て勝家がこよと見ゆともも並んで大悲憤り嘆
云輩が櫻軍。敵小況氣といふ事は愕然さす。そぞ改登りて
至達部面と柳で重んと自兵を列まし指揮ノク。と光秀も志をと
推止。方位漸勢の退帰をもむれて自軍の幸ひう。素より敵を勾引

待人よりの報へとこらす。小遣船がきて來る。自軍勝利の報ね。う。
阪澄渾と二乗づ過あらば経かぬひとと隸小源く勝家も懸て休
めて此うを。茲小坂井右近將監ひ尚初の慶きし久藏成重といふ
あり。生年僅十四歳。用器萬の児。才性質大膽不敵少々。腕小拳臂門の力
を賜へて射御の術を得。七八の比肩して武藝を婦と仰給を熟練也。
十一歳少て初戦か。一死首撃て帰て多々。遠道も父の傍へて大將の軍陣
小ゆく。生懼。射御の術を得。七八の比肩して武藝を婦と仰給を熟練也。
十三歳少て初戦か。一死首撃て帰て多々。遠道も父の傍へて大將の軍陣
の捕虜小判。合戦力さを尋ねて柴田佐久間の隊の主車。達部源八が斬殺をも
視す。と聞説を听て歎歎せ。と源八と號を贈て勇冠軍の稱をえ
とを後二人。其作山の城跡ちく。渝換する。小城をハ方位軍を收て門内入るま

あり。久義此へ駆け走て扇を突き矢を放てやう小
峰たる。今堺の軍小うち勝て功名せし勇士へいとうりふす。方して落字
を吹き出でや。然あら紫田佑久間の狹平宗と折罪し玉ひく切功名と
お詫びまじせりて侍士一人を贈授あひて大將の實撫小まき後の世の序
狀にもあへ身へ移乗するに鐵田家は武者限小て坂井右近将監政尚の嫡
子同萬丈威威重。生年十有四歳。初雅名とも名あるゆゑ。性く
城中をうち出て我と鷹廻を決へ。身へ小猿アマシあらも鐵田侍士のまゐる
まことに身を賣さんと高らう小峰をうちまへ。遠級源八重鶯寒雀樓小有て
あまと竹村家を用てよく見ゆ。十四歳の小冠者あまとこれと對敵
小手出んももとがけあくとうち鼻て返す。もせもあらう。久義大少儀を
之に鄙怪あつ個こみ。跡をあくまで事あし者を出迎もせでひれ聲垂る。

武道も妙らぬ名輩ぞや。備ハ駿卒挑合と宗ともとの侍士と軍をも御
せ妙らぬや。然とそひ武士が怖らず。初雅名とも神子の下へ難小似
とも劣ひせじ。遠峰を一助うけらきて參軍の力を知り。多くて乃推把て矢と審
ひ。狹間の板を的當す。截て放てばあやまらず。狹間板疊元と射敵。そ被
回立す。村發う。擧小あらう侍士輩。こきと見てうち將き。半小勝まつて
這弓歟。あらうと感づ。源八重鶯も久義を凡人あらうと思ひや。そ
く小冠者には質しく罵り轉せ。朝も晴れ。一當あく際と。バ生投
んりの只一張門外小馬を發出し。傍しまく小人の詞。余り小不好的
可憐なま。我等が手辭小石付。武士のまちを教てまんは。坂井へ擧き上
く。と。軒て久義荒糸と笑ひ。所苦忘の條過分か。と言葉捨と推さう
舒馬と眺せて。擧轎の建部ハ謹と立ち方をもおもむ。大車を擧げて立向ひ。



坂長八さかなが
巨勇抽ごゆうひき

坂井さかい
久藏くざな
助すけ



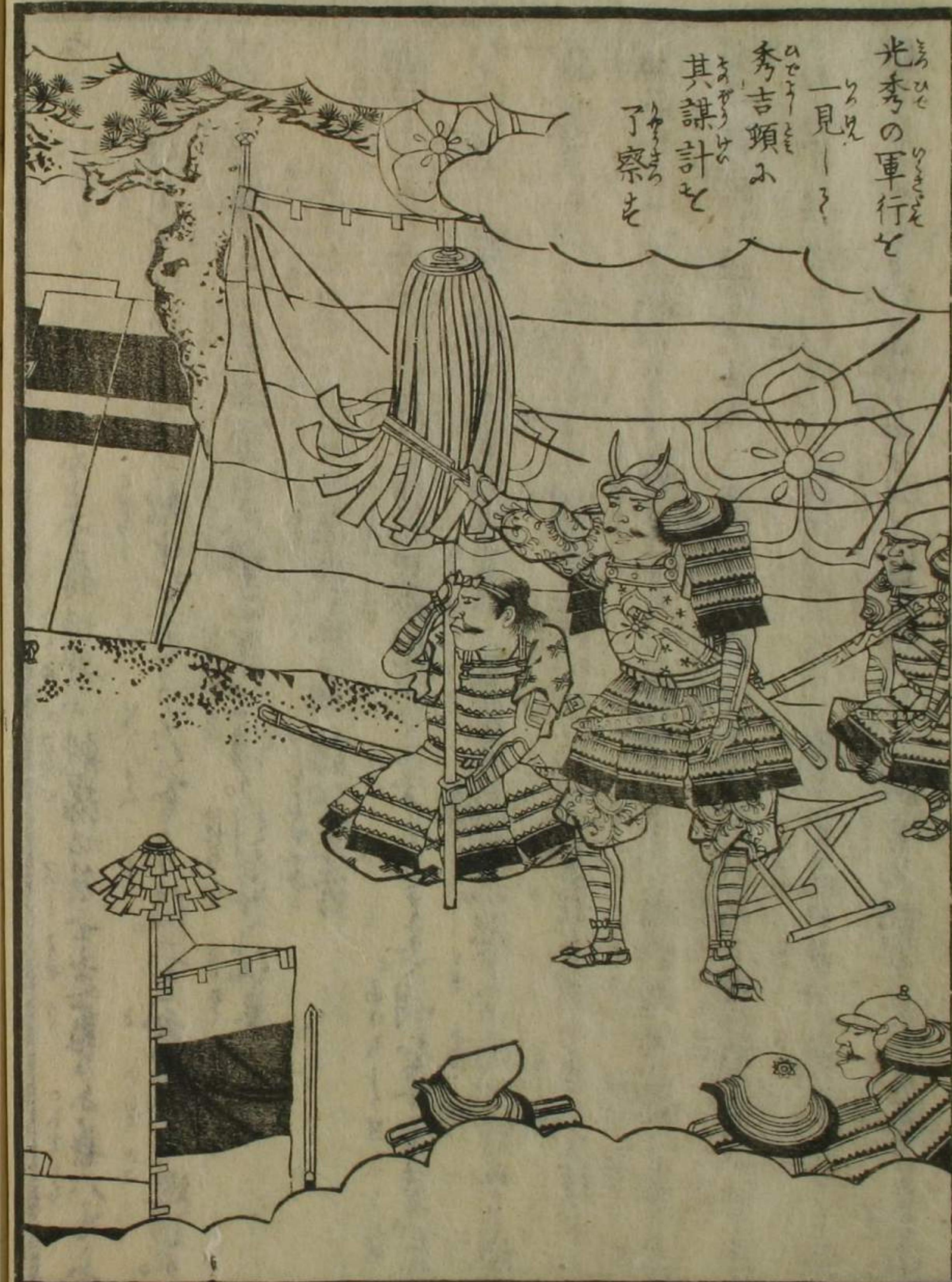
追の追の拠りが久藏馬と龜をと。疾風よりも猛烈しく。槍の津内
やくこと。露塵とも景迷し。了得の源八理會よりて金ノヤ大刀方ひき
従賓込槍と擣首。數歩と折まて久藏成重馬と追せが源八会湯。
厥御と右腕をの。擣捕へんと逐龜。久藏先やと見つる。小
簾の方より一個の止歩。こゝで織田殿の籠小て槍の毎八と号龜。一
文字小走り。建物をまで久藏と敵か。稍夷をし火水とあらて射
す。折る石一鐵田の先陣。咸と作て推登き。城中も五石坂の先へ死
り。長ハと申小追捕。織塵小走よと驚起。滝の先小障間へかけとど長
八たこにも小走。恰もモモ穂と荪るがサ。斬拂と余割と戦ふ。然
ごも歎ハ大勢多。自方ハ昔八只獨院小走く見。さう西へ隸に奉行算
右近明智が計後小隸と。隸の半へ馳登り。此伴セズ。も長八殿と

みゆき接けよ。猪群とも。かど木森坂井。魁隊の兵士を。幕下小長ハもふ
とび脚力と得。投げ返して敵中と右下にたがひ。後二三度激焉逃げ
遂不戻戦ひと。自軍の大勢小軍と。傍ら引連て休憩へり。

本ト加喜作攻先集於城属譲功先秀

眼ハ千里の遠きを照て。己の曉と見る事あるを。明智十萬勝先秀
ハよく謀り。戦ふとり。木森坂井の本ト秀吉が瞬息小忍アの間を射らる。彈
體小量範カ。と謂ふ。備も森坂井の一本余弱へ槍の長ハ接せり。
城名とまて戦ひ。が城中をと。沈覗て吉田長治信田の諸士衆と自
家小指揮を傳へ。こまくと語り。登。槍突そちて福起。織田勢とまて防ぎ
うね森も坂井も傳を。と耻。駿路小石を取る。城の名とハ勝小をうる。
駿小をさんぞりと寄氣を以て追龜。と大將吉田割を。ども耳か。更小

光秀の軍行を
一見り見え
秀吉頗る
其謀計を
了察を



圓入を。追駆もとがちりてる。小笠原と進み。森坂井へそりやうに智
奇密を渠とす。故意と山明まで逃り。波の雪後と過ぎて。遙町木下
森吉原へ既小和田山と素面く陣人を伴ひ奉陣ふ列を事と仔細か云狀
一。直地小室作へ続焉りまし。先考ニ至と首て大木洞。又是下小和田
山と直地あけうやと向う。然作被城へ御の裏中と云ひた。さるどく河
内陣小安内と此方の吉左右を侍り。も待候作ま。御見。京小糸御ノ候。
禪く所子の配部へ調ひらんと事。余はごとく大半ハ威強つまつて候
き。又計御見を。自軍の先鋒。敵小退まで手寧まを歎き。てあくしが。
方僅ニ三町勾引。をあが思ひの隨事と參る。てあ下へて。主意と悟り。千
兵衛少。御軍勢を。主。軍小隊と御羅儀からん乃丈が軍て事し矣。云
後東綱徳へ。し軍め。所隸小属らと。候て。より余と小笠原秀助が軍を

所著志を。然らば余ふ隨ちと兩勢都會一千余騎を左右二翼小隊化を
從事。又。御軍二次帝。遠あんと情を。地小括ひ。奇密を告ぐ。重すと。軍
るが如く森坂井。敗走を。も。株式車。追轡て。東らを。正中城。開く。また
不ふ通じ。史と。狂振。らん。瞬。左右。隣。多く。轍。起る。の。あらば。
城名を。ど。揚。ふ。ま。向。急。小攻撃。城戸隣。小逼。る。が。ほ。名。振。ふ。と。と。
本ト勢。を。一個。も。頼。ま。ど。沙。る。よ。く。心得。く。つ。から。と。做。模。を。へ。く。ら。と。と。
中後。で。よく。叫。永。し。且。掛。り。と。紀。場。を。と。不。余。殊。と。操。組。し。候。ふ。假。を。城
兵。軍。森。坂。井。の。軍。勢。以。養。運。宿。不。逼。下。と。威。拠。が。さ。み。から。輪。室。の。屋。と。將
軍。を。像。く。う。り。と。將。吉。田。出。書。守。長。退。か。て。過。ち。か。逃。せ。く。と。艘。と。揚。た。若
者。を。指。揮。を。る。の。然。ば。と。邊。延。と。と。光。秀。視。を。と。胸。己。そ。よ。タ。ま。と。暗。号
の。を。院。放。つ。や。も。左。二。翼。の。一。千。余。人。箇。を。そ。ち。て。放。轡。山。も。山。勢。を。勢。

かくと駆小喰差遣幕多きに城多大お惶旋り右袖左腰お邊よる。光秀は魅み絶推取龍虎怒て駆うもばこき小儀ひて赤林坂井一宿お嘗と率返し。擇ふれどぞ改めん。然ども禪じ事多ひ光秀急小も遂幕を城多參まて本戸とひれ今や小へり。吉田もこまどらふや諸の儂姓ふ諸止す。自戸と容易退せんと御ぞ至て防戦ノタキハ明智が兵士も心の侵ふ若报ことと得さる。出雲ちひ事ふじて。自戸と城中か纏投制敵とて固やう。遙响本ト秀吉。明智お伴え。五百余人の兵士れうちより一個の侍士。居隣まく馬とまく。塞樓お傳ひ當城是今臨んともる。お義城しゆの面とハ仰て鴻毛小防戦をそ迷く降て助命みし。父母妻夫かも面会させられぬ心せざせんべ城りうとも小方僅観而歎塵ふらまくと呼んで。本戸部の五百余人一宿

小出と嘆き。城共進名推従て更小も意を得た。轍塙井とく嘆く。いふる事のあまかこそ。如歌の詞せり。あらわと訊も待て。被侍士當城實ふるを。前り玉もて高を。一番経は本ト幕吉舟。跡の勇士。其ひ備ひ進名は計畧。自軍の心を惑ひかづく。船量の詞。小儀も。士卒次賀福田姫尾など。這人こそと參む。城中まもく。あまと。其ひ備ひ進名は計畧。自軍の心を惑ひかづく。船量の詞。小儀も。まこと長源隼人。走り逃す。駆車を烈まことに。一個の大漢露出。かう進て。其ひ計畧からん。實と見すやといふ。侵不隼人と捕て。駆倒し。一刀か斬彩も。おりひも。おらぬ事のみ。城中殊小周章。強引ひの事といふ。深く。三十人の勇と達め。近連く。次て旋るに。いろで。駕も渡め。まことに。地盤を。走る。藏する。九あれ。懸布。旗のよ。不擇肉。うちう。聲を。走る。かく。被木下が。百余人。面も振らざ。黒に因音。一番経ぞと。

時も多く、眞鷦地小笠へれ。こまく不續ひて森述田明智もとも不亂。今。城
兵もとく驚顛か。敵とおりべ城兵小似く。自軍もとよりべ城兵を斬傷
を出雲守も忙果數卒残さる。兵を率ひ本丸のうちへ近へて此と
当途と周ゆう。光秀が計謀を。兵の討囲も亦て本下小先合まれ
怒りと今さら詮方を。切てん本丸を移築て。遙替傍をもとまくやと頗
小狹車を廻起て。本丸の構柵を摺合せど。忽一角を曲め。吉田も今
拒抗小途を。一矢塚を。間遡興駆車の命を助けだ。と心を改めて。櫓
小登り。射窓す。拿を捨て。降参のす。と呼むに。先秀は勢と
雲委時後も。重を抱ぜ。城を助命し。又そらべ城を。安瀬
りきんと。静の小光秀。詞縛と。本陣へ。伺ひりふ。參らまつ。少。織田殿
異義なく。辭を。依て。詳密は。もきと。出雲ちへ傳へ。ゆえ。

重光。宇喜太不親悦。手。持を。用て。破車を。出。終。て。底。木。高。又。手。父。出
手。うち。運。て。山。と。親。寺。山。へ。通。き。下。諸。光。秀。ハ。本。丸。と。承。受。制
敵。く。と。あら。さ。あ。口。區。の。若。士。小。己。を。と。争。ら。せ。皆。作。為。城。し。ま。す。と
立。陣。若。し。時。い。己。の。割。を。過。る。多。も。の。も。ら。を。本。下。小。一。番。家。成
せ。ら。き。く。光。秀。更。不。性。く。ら。ぞ。所。智。孫。半。二。金。次。帝。之。宅。發。之。御。因
久。在。處。を。峰。出。し。い。か。ま。ば。に。屬。く。と。城。小。兵。操。軍。に。晴。号。と。あ。
ざ。や。と。七。名。主。の。四。人。一。同。俺。们。能。う。城。中。へ。情。入。て。往。ど。も。俺。小。四。個。計
小。て。外。不。入。一。軍。も。か。然。と。本。陣。と。あ。み。ら。ハ。禪。て。の。諂。約。と。会。せ。を。擴
旋。す。不。入。ひ。の。間。小。久。本。下。郊。大。勢。小。て。密。投。聲。出。て。修。め。俺。们。ダ。豪。勞。徒
小。成。ぬ。と。告。ひ。じ。く。光。秀。も。本。下。が。真。速。方。佛。の。不。思。後。さ。よ。と。舌。を。卷。く。そ
怖。も。う。と。刻。本。下。が。明。智。不。先。達。城。小。ま。方。佛。と。謂。ま。秀。吉。明。智。が

陣不利で、主謀の根を向く。味方の軍勢敗走する。黒崎計の助あること、小笠投の心と便り、歎仰あき先秀の軍勢へ歎小移らしき准備かけとば思ふ。但小笠投らまほじ。此謀もあくびんが爲謀の事ひみゆて、後日の妨とすりぬ。歎を主と光秀面同せ、失ひゆる害心と極まんも知らず。うちを、倘又城攻もやう。先秀驕慢の心と生じ。後の患心と體を度し。然らば染が慢心と一體へ、後日の一事事と謀るべからず。權源が、始尾終焉く小笠投の計略を謀合せ。先秀小敵を見得きざまく難局の解小怪せ。吉田信以智が先陣を坂下まで退来し時、天王院小峰次第當に城中へ投を免げてゐる。こそ御不仕合を靈たゞて、佐々木家は合をかねて、城を更に見外せど、先秀も陣中より、あきらめの人の脱出を知る。然して本トの三十餘人、城外小あらむ者人と隊員と隊員と合

歎がう。小笠吉部が幟布の立色は吹貫と據るよへ推進。本トが高名とも傳。誰も己をと知らざらん。然ども秀吉と見りて、自達へ功せを。城主の大將ハ光秀と見、明智功ありと稱範。衆へも本章陣も披露しる。藤吉部が大義量、實小をと謂つて、備後田殿へも陣小キテをして、算作薄をと所しゆ。本トの智を石出さき共小算賞あり。小ぞ。光秀御面同と施をとりども、心中本トが事計小思き。よくこまと慎んで、矯慢の色と顕ます。こまちの始末都と共、藤吉部が心の儘小をせざる傳神と、謂さんとあいとんと、神通をも得るが如き古今を及ぶ名將なり。然やど小倉田殿ハ和田山を算作薄をし、ときどき諸将の功勞と感賞をしめ至り。ども坂井久義十四歳にして、建於源八景湯と桃三合。自軍の武威と増す。其軍功の所を聞き。

也長八黙止うね信長の軍陣かあり前田小廣て吾上へとまへ進ひ
坂井久経こと。も身の兜の勢小ありかがら遠郊源八多傷と合戦せし
こと。不審小ちがさき惟よし是非力に徳小惟とも近來朽感なド徳
開も久経の始末小於くへ小臣半くごんがどもは御徳ふ事か。假
呪を下め所幸陣を只一弦小て強生箕作の方へとまること最難く
能ゼ。又小臣坂井の謹しつけもとひ參り惟よし。またく豹の蹄接
とくらやね。又化儀へ毛を奪る初稚の人の事。毛一と渠小續へ走登
樹。後小潛びて久経。且舉動を窺ひ居。久しが城に向。そ移りゆく。
如この事ありて後遠船と合戦。了極ひ遠舟を惟よし。然もまた
相應の所。獲矣。ありて之縛小び下候。小臣原東坂井足手小のゆも
かと。ごも亭代の巻。ゆし縛の邊まく埋き惟て。渠が氣力を減しも

せば君の所為最悪く。うきともむ見ひま。坂井親子が本意かうら全彼
此推量つるまう。才の障を頼むせ。言は小及惟よし。信實とて助提
せ。又。信長幼て佐ドた。久経。ゆく。今せあつて。却前へ出さま。深公。湯
と軍の始終を問せ。至る。おほき。名。す。常。から。ぞ。初稚。と。ゆ。も。憚。が。徳。敵
心。中。の。頼。母。と。御。感。賞。ま。め。と。新。創。二。千。石。と。観。行。き。沙。小。長。八
あり。侍。さ。小。奉。揚。を。ゆ。ひ。搞。園。右。出。と。草。や。う。長。八。而。自。身。小。金。九。立。体。と
根。地。一。神。悦。み。沙。小。と。退。出。く。も。胸。坂。井。右。近。改。尚。ハ。我。子。不。過。ち。は
恩。賜。ゆ。く。と。こ。長。八。が。机。持。り。と。前。因。う。こ。き。と。兼。行。り。虚。地。小。長。八
が。許。小。到。す。う。き。と。も。深。切。の。情。を。謝。し。長。く。好。と。結。ふ。と。そ。我。名。の。一。字
を。彼。小。駄。て。尚。と。号。ら。せ。う。此。被。空。在。の。尚。の。尾。列。羽。栗。那。桂。若。泉。村。の。人。小。然。ど。も

性質大酒をまかせ候すを立身せむ。実小武士の慎むべきも

六角又子退去親善寺山属ニ雲留守

秀峰至まるうれ。藤吉郎の大意をりて。江南の地と謀ること。百指百當をや
既小箕作和田山と合時小松山去し。其日も九月十二日。年の上刻小至くぬふ。是
よりひきを攻へども。こ辞説ぢらきと藤吉郎。和田山箕作藩城せし。徳。

國中はまきを伏ぐらむ。遂くあ謀ふ失せ放ち焼拂ひ至る。然もまば當國
の謀主ども。西城義高の事を勤り。忌憚の心を懷くべ。膳宿仲々小勾引か
諸石の城をさしまし。退去の念が生じて。こゝぞ勞せしと功を達るの御
小て候。今日ハ若との氣を奮ひ軍と体をもつて。こゝうち少ひ安穩の計也あ。一
と勤めふと小隨ひ多ひ。和田山箕作と接せらう。然て親善寺山の使
者を遣し。某復又子(の)を遣る。遂に新公方義昭君。東濃(所)

動度をなせし。遂に之好と附連して、萬事一。信長御魁つらまつ
て死命せし。被り濃尾の諸軍を催促し。此生を巻向いて作。六角家をひきだ
軍より恩賜莫大の家うちにも居恩を忘却か。遂に小倉陣せら
條と桑の木の氣の毒をうち。箕作和田山と離れて。比より直小を方へぢ
進せり。まことに一端の不義を悔ひ。將收城と聞き。台駕を逐へて
まづらぶ。前非を重ねむべし。歎き死小からず。即時小推進。一戦のひ小城
を一奇機。因の強威をもぎり。まん國小吾。佛の義をう。義を小歎だる
輩。逆賊勝力の不義をう。丈夫道の義と尚ぶ誰うが不義か。與をつ死
人道の若臣と本とぞ。誰の若臣と減らる。この好松承。佛の後もまことに代お
せん。歎死ても慘害を。彼思意せらきて退去むべし。と重ねて退去小本

六角義祐
一族を率く
觀音寺の城より
退去の圖



下よりも別小使士を添らまて。年來無懸せし事多き。ひつふもなし。佐木本
家の長久をりんこと。と思ひよ。と。言ひて。報も寺守の某復又ふと。おどめ
け。諸士一同小物て。着ひ醒るやく。算作和田山の日もあらず。を。落城せしこと。全
織田家の武威智謀。諸家の小勝き。の。あらざ。天道の助。か。人道こま。小從
の理あべし。と。漸く思得。機会。信長の使節到來。と。頗る理解せ
と。詭をしう。有係小難面くも。數得る。署町寧小。應對せらき。此御返辞。ハ此
方より。而刻意。べーと。信長は。使者を。迎へて。居。某復諸士。小りふ
さき。今。當城へ敵を引連んこと。末代までの。仙臺。う。然と。之。陣系
せん緯。も。今更。面用。多ひ。小倅。こ。ま。奉事。ら。比城を退かず。敵小。微脱。も
之。未だ。と。云。新左衛門尉。ま。發。と。残。也。入道。父。當。故の。も。小女性
初雅。が。先。達。石。り。も。石。散。を。石。教。の。城。ぞ。落。行。る。備。織。田。殿。總。本

陣。大。使者の帰。と。待つ。既。曉。ゆ。い。小。と。間。セ。る。小。是。某。復。足。子。の。應。對。様
先。達。も。と。ひ。大。小。ま。最。私。を。連。送。少。て。南。邊。養。の。所。方。より。而。刻。意。一
あ。げ。く。と。詞。小。て。後。と。言。大。を。信。長。を。見。と。す。一。か。き。を。終。も。あ。べ。と。今
を。も。と。藤。吉。序。附。傳。主。を。明。日。の。君。の。御。布。陣。セ。報。音。寺。し。役。さ。で
り。さん。某。復。之。より。御。返。事。を。寒。一。あ。げ。ん。と。接。授。セ。一。還。城。か。さん
不。存。う。を。誠。主。去。修。り。た。が。精。誠。い。ふ。ど。あ。う。惟。こ。も。際。ざ。ら。と。一。て
心。く。同。怖。小。隠。作。ち。ん。然。ら。べ。十。日。を。過。さ。ず。と。一。御。上。宿。あり。と。京。か。
こ。そ。が。信。長。也。小。も。喜。ば。げ。小。も。欲。せ。曉。さ。を。主。の。前。小。日。を。十。日。賜。て。里。也
き。あ。み。る。い。せ。え。主。を。大。き。の。御。主。を。連。て。報。も。寺。山。の。城。中。も。主。宿。小。終。も。と。御。多。の。人
を。こ。そ。れ。序。往。の。家。を。走。御。主。報。も。寺。山。の。城。中。も。主。宿。小。終。も。と。御。多。の。人
の。個。い。が。次。貢。財。用。舉。を。持。運。を。我。落。ま。と。落。失。と。と。之。伴。ある。小。信。長。大

か感りてゐひ。本下おとこを重おもきて不ふ小ち於おとへ言いす詔の違たがひみし。と悦えびえままは
詔の音おときへ入い様ようをまんと總軍ぜうぐん機きと率そつ後こう、極きわ小ち近ちかくくわく觀くわんるべ。機きの下さ
龍りゆうと飛とせ、立達たつたつねる。殊こと難むず力りき、凡ごんの光ひかり照てら候まつて、軍ぐん兵へいのの能のりし体たいあ
る。然しかども大將だいじょう軍ぐん領りょう、衆しゆ多おおの諸しよと退しりぞ去この事ことと既すで小ち後こう仲なかありして、
心こころ足たま敵の計けい略りやく少すくなて、斯この間ま様ようとようとうらん運うん小ち弱わい取とり、指さ揮きも連つづて
暢はい氣き華はな、純じゅん誠せいらんとくるを。本ほん下おとこ小ち推すい判ばん、人ひと將まつ既すで小ち退しりぞ去こととも、
誠じゅん小ち彷ぼう彿ふのの城じゆをうじじて、名なをなははむ勇いの士しももううううららざざららんや
小ち勢ぜいをもりて、人ひと軍ぐん小ちららととううづづき營えい士しをを、密ひそ易やすりりととややくくささるを。そそう
のの舉あ動どうをを向むかへへて、人ひと軍ぐん隊たい伍ごをを進すす玉たまへへと因いん其その見み
たたききども耳みみも密ひそききと模も紙紙破はのの士し輩ばい、仰あ首くび顎あご事ことのあるべき
くく手てをを拂ぬははれ、軍ぐん幕ばくとと御ご軍ぐん幕ばくとと、一い樓ろうと推すい進すす玉たま、城じゆ中なか重おも音おとももせせをを摸なでる
例たとええと、放は圍い指さ揮きして、爲ためひ攻こう登のぼららんととぞぞせせららききる。

